

我が心の鉄道・飯田線を 絵本で読む

小原秀雄
(高35回)

あれは確か高校2年のときだった。なんとなく鬱々とした日々を送っていた私は、ふと「海に行きたいなあ」と思い、密かに「プチ家出」を決行した。

ある土曜日の昼下がり、親に「今夜は友達の家に行って泊まるから」と言つて家を出て、飯田駅から豊橋駅方面の電車に乗った。単純に、豊橋まで行けば、海に出られると思つたのだ。小さなりユツクの中身は寝袋と地図だけ。夕方、豊橋駅に着き、豊鉄渥美線に乗り換えて渥美半島の先端にある伊良湖岬をめざした。

途中でヒツチハイクをしながら伊良湖岬に着いたときには、日がとっぷりと暮れていた。暗闇に波の音だけが響く中、何とも言えない解放感に浸りながら、岩場に寝袋を敷いて眠つた。

翌朝、テトラポッドの上でしばらく海を見つめてボーッとした後、豊橋駅まで戻り再び飯田線に乗つて、



『飯田線開通の夢と勇気 私たちに託されたもの』
(飯田市赤十字奉仕団紙芝居班)

である。飯田市赤十字奉仕団紙芝居班が制作し、2021年春に出版された。約80人の個人や団体から寄付金計140万円を集め、1200冊を制作したという。

絵本のものになつた

のは、2019年に制作された36枚の紙芝居。父親（八代目伊原五郎兵衛）の

遺志を継ぎ、私財を投げうつて、辰野一天竜峡間の開通を成し遂げた伊原の功績や、全線開通までの歩みが描かれている。ちなみに、この伊原五郎兵衛のお孫さんが、昨年発行の本誌第17号【わたしの人生】で寄稿文を書かれた、伊原江太郎さん（高18回）である。

同紙芝居班員が、数少ない資料を集め、鉄道関係者や前述の伊原江太郎さんに聞き取り取材するなどして制作したというこの絵本。完成前には飯田線の元駅長らとともに、辰野から豊橋まで実際に乗車し、事実関係を確かめたという、まさにドキュメンタリー的な一冊だ。

この絵本の主人公は伊原五郎兵衛だが、ここに登場す



●おばら・ひでお
飯田市上郷出身。立教大学仏文科卒。広告代理店勤務後、米国ニューオーリンズに2年間滞在。その後フリーライター・編集者として雑誌を中心活動。現在は書籍出版を手がけるスローウォーターレイバーブラザーズ代表。杉並区在住。

夕方、何事もなかつたよう帰宅した。

私の記憶に残る「飯田線との思い出」は、これだけだ。

高校は自転車通学だったので、飯田線に乗る機会はほとんどなかつた。しかし、このひとり旅で体感した飯田線の素晴らしさは今でも鮮烈に記憶に残つてゐる。あの日、自由と解放を希求する思春期の少年のちょっとした冒険を手助けしてくれた飯田線。まさに我が心の鉄道である。

飯田線は、昔から鉄道愛好家の間で有名な鉄道だ。車窓からは伊那谷の田園風景や南アルプスの山々、天竜川の渓谷を楽しむことができる。近年は山あいの無人駅が「秘境駅」として注目を集めている。

そんな飯田線をテーマにした絵本に出会つた。タイトルは『飯田線開通の夢と勇気 私たちに託されたもの』。

JR飯田線の前身、伊那電気鉄道の開通に尽力した伊原五郎兵衛（1880～1952年）に焦点を当てた絵本

るもう一人の重要な人物がいる。その人物とは、三信鉄道（三河川合駅～天竜峡駅間）建設のために測量技師として北海道から招かれたアイヌの酋長であり測量技師の「川村カネト」だ。「危険な岩盤と、荒れ狂う天竜川が流れれる天竜渓谷を、いったい誰が測量するのか」と誰もが尻込みする中、「この難しい工事の測量士は、北海道の鉄道の測量経験があり、山中を自由に歩き回ることのできるカネト以外に考えられない」と、彼に白羽の矢が立つたのだ。

1927（昭和2）年、アイヌ測量隊長・川村カネト（当時34歳）をリーダーとする一行が天竜峡に到着。測量を終え、工事監督として天竜峡トンネルを掘り始めるのだった……。この後、「え、そんな出来事があつたのか!」という、ちょっと衝撃的な事件が描かれているのだが、それについてはここで敢えて伏せておく。

川村カネトについては、『カネト 炎のアイヌ魂』（沢田猛著／ひくまの出版）という本で、自然の厳しさと数々の迫害に耐えて生きた生涯が綴られている。旧飯田線開通に命をかけて尽力したエピソードや、その後の伊那谷の人々とカネトとの交流についても詳しく述べられていて、今回紹介した絵本とともに、ぜひ読んでほしい一冊である。